青果育種研究会

八戸市場で品種見本市

優良品種に農家らが注目

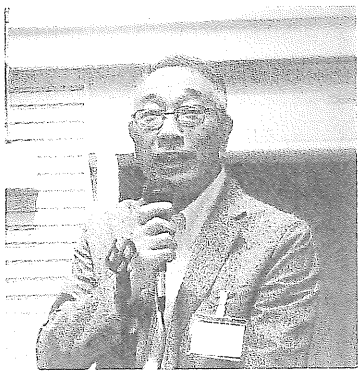
種苗会社や青果卸などで構成する青果育種研究会（会長＝後藤正明・横浜丸中青果社長、会員78社）では、第167回目となる「品種見本市」を八戸市中央卸売市場で行った（協力＝八戸中央青果）。テーマは「夏が旬の青森野菜」。種苗会社8社が40品種以上を出品、産地市場である同市場へ出荷する農家らの注目を集めた。

当日は後藤会長、横町芳隆・八戸中央青果会長の挨拶、松田大平・八戸市農林水産部部長の祝辞に続き、種苗会社に40年以上勤務した寺田保氏（野菜相談室「北天」アドバイザー）が、「青森根性を発揮せよ！　期待される根菜類」として基調講演。

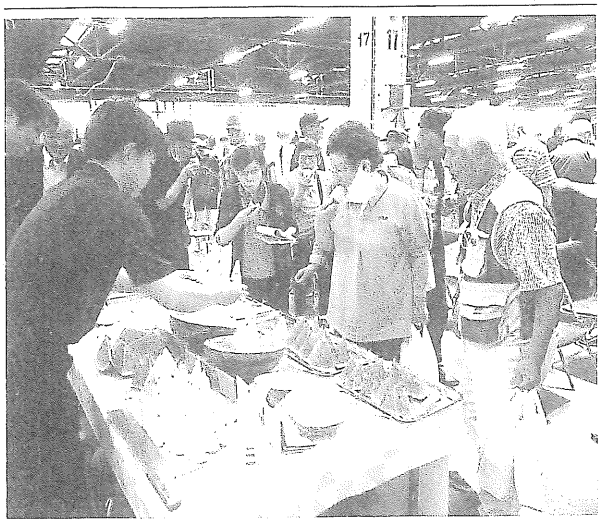
寺田氏は「従来から言われていることが正しいと思わず、常に現場を見ること。生産者を回ってみると、ちょっとしたことだが良いヒントが多い」「スーパーは産地が切替わるより、良い品質の産地の商材を長期間扱いたい」「栽培面積が（急激に）増えると、手抜きして雑になりがち。とくに根菜類は収穫して洗ってみて、初めて品質がわかる」などと指摘。

そのうえで「青森県の農業生産者は（他産地がやらない）雪の中で農作業をするなど、馬力、粘り強さ、青森根性がある。また火山灰層が厚くゴボウやナガイモの生産に適しているほか、南部の沿岸地や高冷地は北海道並みに冷涼で、出荷期間も長い」と青森県農業の優位性を強調。最後に「生産者、種苗会社、地域の種苗店、卸売市場、農協など関係者が連携し、産地を維持してほしい」とした。

さらに出席した生産者や市場関係者、小売業者は、種苗会社のブースで各社が推奨する品種の食味や栽培方法などを確認した（写真下）。



（上）青果卸売場で行われた品種見本市で挨拶する後藤会長（下）農家を惹きつけた寺田氏の講演



第2894号

農經新聞